
バカノリエフ ～杜丘と翡翠の非日常的な日常～

貴雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカノリIF〜杜丘と翡翠の非日常な日常〜

【Nコード】

N1870X

【作者名】

貴雅

【あらすじ】

この小説は『バカとテストと召喚獣』の二次創作の『バカとノリと召喚獣』のIFストーリーです。主な舞台は杜丘と翡翠で、主なキャラはオリキャラの方達。ぶっちゃけると原作のキャラは基本出てきませんし、召喚獣も出てきません。バカノリ（元）が運営さんに消されてしまったので『なにこれ？』と思う方が多いかもしれませんが、気楽に見てみてください。

Prologue

人生とはなにか？

こう聞かれたら俺は迷わず『運命』と答える自信がある。

『運命』とは生まれた時から……いや、生まれる前から既に決まっているものであり、人はそれから逃れられることは出来ない。なぜなら、未来がわかっていてそれから逃げようと思って逃げてみても、その未来もまた『運命』なのだからだ。

『人生』とは『運命』に決められた通りに進むものである。

ならばこの考えは万人が共通して思っているのか？

—— 答えは否。 だんじて否。 この考えは俺の自論にしか過ぎず、人の数だけ『人生とはなにか？』という質問の答えは変わるだろう。 なかには同じ考えを持つ者もいるかもしれないが、同じ『運命』や『人生』を辿れることは無に等しいであろう。

つまり『人生』とは一人一人辿る道は違っており、『運命』をわかることは無理なのだ。

この物語はそんな様々な運命を課せられた者達の、少し変わった日

常のお話。

舞台は文月学園のある市から四駅ほど行ったところの杜丘市で、時
はこの物語主人公《浅月雅夜》が中学二年生の頃。

ある出来事^{出来事}をきっかけにこの街と根強く関係をもつてしまい、否応
なしに巻き込まれていってしまう。

……いや、違う。

己の意思には関係なく物語に関わって非日常を体験していくという
ことは、普通は嫌だろう。

だが雅夜は違う。

己が求めるは非日常。ただ繰り返すだけの日常^{まいにち}とは違う、想像も出
来ないような狂乱の日々。

時には生死を痛感し、時には沢山の屍を乗り越え、時には世界の裏
に関わり、時にはオカルトと遭遇し、時には異次元へと干渉する。

そしてその先にあるものとは――。

バカとノリと召喚獣ⅠⅡⅢ 杜丘と翡翠の非日常な日常

本編である『バカノリ』に出てくる彼ら・彼女らの気になる実態が
此处で明らかに。

e p 1 - 1 (前書き)

『さて、俺はもう帰るとするかな』

『もう帰っちゃうの？一緒に弟を見にいこうって誘うつもりだったのに』

救急車に乗せられようとしている弟のほうを指差しながら尋ねられる。

『いや、遠慮しとく。俺はたまたま通りかかったただだし、やりた
いこともあるからな』

そう言葉を残して、俺はこの場を立ち去った。

——そう。俺にはまだやらなくちゃいけないことがあるんだ。

家に帰って居間のソファーに寝転ぶ。時刻は午後7時。そろそろ飯を作り始めないとなあ……。

確か今日は浅月深風^{ねーさん}も帰ってくるし、インスタントで手軽に済ませるわけにはいかないか。

「——ふむ。偶にはこっちから明久の奴でも誘って三人で飯にでもするか」

そこで、明久に飯を作らせられれば尚良し。ってなわけで早速連絡。

【P r r r P r r r P r r r —— ガチャ】

「ハロー明久。生きてるか？」

『電話に出て最初の言葉がそれ？まあ、いつも通り元気だよ』

「ちっ」

『今舌打ちしたよねっ！？なに？僕が元気でいるだけで雅夜は不機嫌になるの！？』

「なにを当たり前のことを今更。ほら、とっとと俺の部屋に来て飯作れ。今日はねーさんが帰ってくるんだから腕振る舞いやがれ」

『あれ？それが飯作ってもらった側の態度なのかな？』

「それが飯食わせてもらえる立場の態度なのか？そうか、わかった。別にこっちはお前が居なくても困らないから、食いにこなくていいぞ」

『ごめんなさい。僕が悪かったです、調子に乗りました』

【ガチャ】

わかればいい。電話を切ってそのままねーさんに電話。明久も一緒

である領を伝えておく。まあ、いつものことだからねーさんもわかっていていると思うが。

【パンツ】「到着。ねー雅夜。今日はなにを作ればいい？というか冷蔵庫になに入ってる？」

と、考え事をしてる間に吉井明久^{バカ}が勝手にドアを開けて入ってくる。俺と明久の家は同じマンションなため、すぐ近くなのである。

「この間補充したばかりだから色々入ってるはずだ。料理はなんでもいい」

「そう？じゃあパエリアでも作ろうかな。最近食べてないから作りたくなっちゃったんだ」

「ねーさんもいるから丁度いいが……好きだなパエリア」

パエリアは明久の好物で、ねーさんの大好物の一つでもある。まあ、ねーさんは納豆と味噌田楽以外はなんでも好きなんだが。

エプロンを装着して台所に入っていく明久を余所に、俺はリビング^{スーパーフアミニコン}でゲーム機を起動させる。

「ってスーファミとか懐かしいものをやるね。カセットは？」

「マリカ。なぜか無性にやりたくなつてな」

「……一人でパーティーものやって楽しい？」

「ゲーム好きの目の前でパーティー物のゲームをするのは楽しいな」
「ちくしょーっ!!」

料理でゲームをすることが出来ない明久の喚き声をBGMにマリカを始める。1Pにテレサ、そして2P（・・・）にピーチ（・・・）が入る。

「3・2・1。READY——GO!!」
「ちょ!?!いつのまにかみーさんが帰ってきて雅夜とゲームしてる!?!」

説明はいらねえから……っ、とつとと飯作っておけ……っ!!

「ふっふっふ」私のピーチに勝てるかな?」(一位で独走中)
「くそっ。その余裕な態度がムカつく——よっしゃ!赤甲羅3来たっ!」(少し離れて二位)

「残念。こつちには緑甲羅3&バナナ3の盾があるから効かない……あれ?ちょ、なんで緑甲羅をくぐり抜けて赤があたるのよ!?!」
「甲羅の周期なんて学習済み!当てることなんて簡単なんだよ!」
「立ち上がりにまた赤甲羅!?!虐めだよねソレは!!」

虐め・非道結構!勝ちやいいんだよ勝てば!

「おい、二人ともご飯の仕度できたよ……」
「少し黙ってて(ろ)!!」
「冷めちゃうよ!」

「ったく。もう少しでねーさんを抜けたのに。良いところで邪魔しやがって」

「流石に緑甲羅の盾を突破してくると思わなかったよ……」
「反則でしょそれ。……って、あれ?スーファミのマリカのアイテムってそんなに出たっけ?」

「ああ。ねーさんが来たあたりからWIIのマリカを始めたからな。

何度CPの青甲羅をくらったことか」

「青甲羅は抛けるの難しいよね」(抛ける方法をマスターしてる)
「簡単にやってのけるねーさんに言われたくないんだが」(青甲羅が来るタイミングだけちゃっかり二位に下がる)

「……二人ともおかしいよ」(いつも雅夜にはめられる)

まあ、マリカはやり込んだ勝ちだからな。初心者とレインボーやると余裕で一周差とか出来るからな。二周差は相手によって難しい。

「そういえばマサ君。今日、火事に巻き込まれたって聞いたけど身体は大丈夫かしら？」

「あ、そんなこともあったね。すっかり忘れてたよ」

「ん？あ、ああ。特に怪我はなかったが……もう噂回ってるのか？」

事が起こったのは今日の夕方。で、今は夜。たったの4時間ってのはいくらなんでも早すぎるだろ。

「うん。『夜叉が今度は火事に挑んだ』って結構広まっちゃってるよ。雅夜の『夜叉』の呼び名は『悪鬼羅刹』の坂本、『鬼神』の長瀬に続いて有名なんだから広まるのが早いんじゃないかな」

「『不良グループを単騎で落としたことがある年不相応の力を持った中学生』だったっけ？マサ君も不良の仲間入りしちゃうのはお姉さんとして賛成できないんだけどねえ……」

「はいはい、その話は止めとけ。俺だって男なんだから暴れたくなる時期ってのがあるの。普段は真面目にやってるんだから、それくらい多めに見てくれ」

良いことではないのは確かだが、鬱憤ばらしに始めたらいつのまにかこうなっていたんだ。今更止めるのもどうかと思うんでな。

「つと、そうだ火事の件なんだがな。ねーさん。父さんが母さんの連絡先知ってるか？俺が知ってる最新の連絡先は一週間前のコロンビアで、もう移動してるはずだから今の居場所を知らねえんだよ」
「えつと、今はどこだったっけな……。確かアメリカの……。ワシントンD・C・じゃなくて、ニューヨークでもなくて……」

「ラスベガス？」

「そう、それぞれ！流石アキ君、ナイス♪」

「いや、それほどでも」

ねーさんが明久を褒めて明久の頭をなでると、明久は傍目でキモい表情をした。というかマジでキモッ！

「どうせ明久のことだから、思いつくのがその三つ以外になかったんだろ」

「う、うるさいっ！別にいいだろ、当たってるんだから」

「それでハワイに居るお母さんたちなんだけど」

「って、あれ！？ワスベガスじゃないの！？さっきの『それぞれ』ってのはなんだったの！？」

いつものことだろ。

「連絡先の番号は忘れちゃったから後で教えるね。それで、お母さんに聞きたいことでもあるの？」

「聞きたいっていうか、父さんたちの同級生に警察のお偉いさんがいたはずだから、その人の連絡先を知りたくてな」

「警察のお偉いさんって……今度はなににするつもりなの、雅夜？」

警戒体制をとる明久。

なんとも俺の悪戯の餌食となっているからか、俺が悪事を働こうとすると明久はなにかを感じるらしい。『なんか、こー、黒い気配が

見える？って感じかな』とは本人談だ。

「するとしても明久相手じゃねえよ。ほら、さっき火事がどうたらこつたら言っただろ？その犯人の顔をみたから教えてやろうと思っとな」

「それだつたら普通に警察に行けばいいじゃない。どうしてお偉いさんに言わなくちゃいけないのかしら？」

母さん達に連絡をしようとしてたねーさんの手が止まる。というかあの親達。いい加減ねーさんだけじゃなくて俺にも連絡先を教えろよ。

「おいおい。そんなもん決まってるだろ」

「決まってるじゃないよ。どうするつもりさ？」

「――捜査に混ざるんだよ」

e p 1 - 2 (前書き)

『というわけで近々俺の息子がそっちに顔を出す。一応伝えておいたぞ』

『いや、意味が全くわかんねえんだが』

『だから《警部であるお前のコネを使って息子が捜査に強力になりたいらしいから、手伝ってやってくれ》と何度言ったらわかる』

『一度も言ってねえ！しかもなんだその内容！？……お前の息子はまだ中二だろ。いくら俺でも署に学生を入れて、捜査に強力させるなんて無茶があるぞ』

『そうか？噂で聞いた限りじゃお前の部署に学生の手伝いがいると聞いたんだが、違ったのか？』

『なんで海外にいるはずのお前のところまで噂が流れているんだ！？そりゃ、まあ、確かにうちの部署には一人いるが……あれはかなり特例だぞ？』

『それを言うなら俺の息子もかなり特例のはずだ。なんせ俺と深夜の息子だぞ？普通なわけがあると思うか？』

『……。仕方ない、話だけでも聞いてから判断する。で、顔を見せると言ったがいつくるんだ？』

『今日。というか日本の時間てきにもうそろそろくる頃だと思うぞ』
『もっと早くいえーっ！！』

俺が住む家から三駅ほど離れた所にある杜丘という町。俺は今、その町中のある一軒家の前に来ていた。

「……………此処か」

父さんの言われた通りの住所にある《戌井》と書かれた名札。事前に調べておいた警察の名簿のなかにあった警部の名前と同じ。どうやら間違ってなさそうだな。

【ピンポーン】

インターフォンをおして待つことしばし……

『どうぞ。鍵は開いてるから入ってきてくれ』

「……………？あ、はい」

見た感じカメラ的なものは付いていない古いタイプのインターフォンのようだが、顔をみない＆名前を聞かないで入れていいのか？まあ、此处で立ったまま説明するのも面倒だから助かるのだが。

「んじゃ、お邪魔しま——」

【カチッ】

「——っ！？」

ドアノブを回したときに聞こえる音とは全く違い、まるで何かのス

家のそこら中に仕掛けてあるから家族の俺でも解除しないと迂闊に入ろうとは思いたくないほどの出来栄えだからお気を付けてな。ヘタすれば死ぬかもしれないから」

そんな危険なものを最初っから仕掛けるな。

『あとお前さんが来るのがわかったのはほんの数秒まえ。だからトラップを切れなかったんだ』

「数秒前？まさか。俺が父さんに言ったのは二日前だぞ」

『いや、嘘じえねえぞ。ちなみに今も風^{ふう}と電話は繋がっている。相変わらず性格が悪いのは治ってないことがわかったな』

「……死ね、とでも伝えておいてください」

『断る。そういうことは自分の口でいいな。今トラップを解除するから入ってきてくれ』

数秒後、【カチツ——ガタガタ、ピー】という音がして、さっきまで感じていたいやな気配はなくなった。どうやら本当に解除してくれたみたいだな。

それにこの人は父さんみたいに腐った人じゃなくて良い人みたいだし。

「——んで、マサ坊。俺になんの用なんだ？」

戌井家のリビングにて。テーブルを挟んで『戌井榊』——榊さんの正面に座る。榊さんの隣には父さんと繋がっている電話の子機が置いてある。というか初対面からマサ坊って呼ぶのはどういうことだよ。

『ふむ。そういえばどんなようがあるのか俺も聞いていなかったな』
『言わなかったからな。というか電話代は大丈夫なのか？国際電話の料金はバカにならないんだぞ』
『気にするな。この程度なんの問題もない』

そんなに金があるんだったら生活費をもっとこっちに回してくれ。

「俺は問題あるけどな！俺はお前さんほど金は持ってねえんだよ」
『嘘をつくな。出世をきちんとしていて、エリート街道まっしぐらのお前がなにを言う。芳樹でもあるまいし』

「芳樹のことは言うな。アイツはアレで幸せなんだ」

芳樹？芳樹というと……確か父さんと榊さんの同級生で木下芳樹って名前だったっけな。いつも苦勞人であるって昔父さんと母さんが言ってるのを聞いたんだっただな。

「えーっと、盛り上がつてるところすまんが、話を戻していいか？」
『ああ、構わない。雅夜が榊になんのようながあるか、って話だったよな。なんでなんだ？』

「俺に用があるって時点で警察関連の事ってのはわかっているんだが……まさか、なんか犯罪にでも巻き込まれた——いや、犯罪を犯したのか？おいおい。揉み消しとかは勘弁してくれよ」

「なぜ今最悪のほうに言い換えた！？しかもどっちも違げえよ！俺は普通に捜査に協力させてくれって言いに来ただけだ！俺が父さん

の息子だからって酷い奴だと思わないでくれ」

『おいまで。今お前、遠まわしに俺を侮辱しただろ。電話越しだからって調子に乗るんじゃないぞバカ息子』

「いや、すまんかったなマサ坊。風と深夜の息子だからって、あの二人並みに性格が悪いというわけではないよな。本当にすまない」
「わかってもらえればいいです。あの二人と同じにされるのが嫌なだけなんで」

『ま、待て。お前ら、それは冗談だよな？ 冗談を言ってるだけだよな？ な？ な？』

「……………」

『そこで無言になるなよ。ちくしょーっ！！』

ザメザメと噓泣きが聞こえる始める。正直に言おう。マジでうざったいです。

「……………って、捜査に協力させるだあ？ 今サラっと言いやがったから聞き逃すところだったぞ。またなんでそんなことを？ 風みたいに面白そうだからとか馬鹿げた理由だけでやらせられる仕事じゃねえんだぞ。第一、どの事件の捜査をしたいんだ？」

身を乗り出して真剣な顔をして聞き返してくる榊さん。どうやら掴みはオーケーみたいだな。

電話の向こうから『失敬な！』と反論する声が聞こえたが無視。

「この間の放火魔事件。起こってから一週間もたってなく、犯人の特定もされてない。そして犯人へとつながる証拠が見つかってない事件」

「放火魔事件……………。ああ、あの双子の子供が二人巻き込まれたが通りすがりの少年に助けられたとかいうやつか。もしかしてお前さんがその少年なのか？」

「ああ。ちなみに俺は、その時犯人の顔をみてる。そして絵に書けと言われたら正確に、写真で撮ったぐらいのレベルで書ける自信がある」

「——っ」

『え？なにに？話がよくわからないんだけど。俺をのけ者にしないで、二人だけの世界に入らないでくれると助かるんだけど』

「……………」【ピッ——ツーツーツ——】

無言で電話を切る榊さん。グッジョブ！！

いい加減邪魔だったし、うるさいだけの存在だったからな。むしろ今までなんで切らなかったのか不思議だ。

「……………なるほど。つまりお前さんは犯人の情報を提供するかわりに、マサ坊も捜査に加わさせろって言いたいんだな。そしてその情報は俺が了解しないかぎり教えるつもりもない、と」

「理解が早くて助かりますね。まあ、だいたいそんな感じです。無理なら無理と言ってもいいんですよ。自分の力で探して、自分の力で犯人を警察——の前に病院に入れてから連れていきますんで」

「病院って……………復讐みたいなことでもするつもりなのか？」

「復讐とは人聞きの悪い。ただ俺は犯人の性根^{そいつ}を叩き直すだけですよ、物理的に」

「変わらなないか、それ」

そりゃもちろん。でも、ま。問題はそこじゃない。

「で、どうです？いけるのか、いけないのか」

「……………無理ではない。俺のところの部署は気さくな奴らが多いし、人手不足だから使える人材はいつでも歓迎している。だが細かいこととに五月蠅い奴が一人いるからなあ……………。そいつさえ説得できれば問題はないはずだ」

「一人だけ？俺が言うのもなんだが、中学生が捜査に加わることを反対しそうな人がたったの一人だけってのはおかしくないか？もつと多くいると思っていたんだが」

「いいや、いない」

少し困ったように頬を掻き、溜息を吐きながらもきつぱりと断言する榊さん。

まるで昔を馴染むような空気を漂わせて続ける。

「実はというとな、前例がいるんだよ。マサ坊が今からやろうとしていることをやってのけた嬢ちゃんが一人。それも結構前から、そして今でも居る」

「……なん……だと！？」

既にいるだと！？しかも嬢ちゃん——つまり女でやってのけたやつが！

だから榊さんも無理ではないと言ったのか。前例がいるのならそれは無理なことでは決していないのだから。

——こいつは楽しめそうだな……っ！

e p 1 - 3 (前書き)

『皆！俺の一任で決めちゃった話だが、今日から俺らに同僚が一人増えることになった！』

雅夜に相談された次の日。部署に入ってすぐに俺は中にいる奴ら全員に聞こえるように大きな声で宣言した。

『マジっすか！？ナイスですよ榊さん！これで残業が少しは楽になる……！』

『待て待て。まだ戦力になるとは決まってるだろ。まあ、勿論榊さんが連れてきた人なら戦力にならないことはないと思うが』

『そこんところはどんな感じですか？』

同僚が増える、という言葉に反応して残業組がこっちに駆け寄ってくる。

『新人だから最初からは無理だが、慣れれば……一週間もあれば相応の戦力になるはずだ。期待しとけ、お前ら』

『『よっしゃあーっ！！』』

俺の言葉にガッツポーズを取り合う三人。駆け寄って来なかった奴らも皆ハイタッチなどをして嬉しがっていた。

『———その話、ちょっと待ったあーっ！！』

ただ一人を除いて。

（side 榊）

「——その話、ちょっと待ったあーっ!!」

拍手活性の声の中、声に怒気を混ぜてドカドカと俺の目の前まで歩んでくる奴がいた。

「おう、どうした小高^{こたか}。なにかあったのか？」

「ありますよ!! いたいこれはどういうことですか!? 同僚が一人増えるとかそういう話、最近全く聞いてませんよ!」

「そりゃそうだろうな。俺だって昨日決めたばかりなんだから、誰も知ってるわけがないだろ」

「そういう意味じゃなくてですねっ!! アナタの一任だかなんだか知りませんが、新人なら相応の書類やらなにやらで事前にやるべきことが沢山あるじゃないですか! そういうのをワタシは一度も見ないっていつてるんですよっ!!」

今日はいつにも増して元気だなあ。

この低血圧にして五月蠅いコイツは狩野小高^{かりのこたか}といってこの所内じゃ俺の次の次くらいに偉い立場にいるやつだ。仕事は優秀なんだが、此処では数少ないマニアル思考の持ち主なのでいつもツッコミやダメ出しなどの担当をしている。

「だから、そんなものは一切ないとさっきから言ってるだろ? 全く話を聞かない奴だなお前は」

「一言も言ってますからね!？」

「ん、そうだったか？」

うーむ。さっき言ったと思ったんだがな。俺も年をとったってことか？

「というか書類がないってどういうこと——ま、まさか……っ！」

「そのまさか、だな。今回も嬢ちゃんの時とほとんど……というか全く同じだな。うん」

「なに一人で納得してるんですか！？ワタシは絶対に認めませんからねっ。断固反対します！」

「そう否定しなかったっていいじゃねえか。お堅いのは学生の頃から全くかわらねえな。嬢ちゃんの時だって認めてくれただろ？」

「昔の話はしなくていいですっ！というか彼女の時だってワタシは否定しました！ま、まあ、最終的には認めざるを得ませんでした……。ですが、今回はなにがあっても許可しません！ただでさえ中学生に警察の手伝いをさせるなんてことは、世間的に悪い印象をあたえるんです！こんな状況で二人目なんてことをしてしまっているわけありませんっ！！」

と言ってもなあ……。すでに決めたことだし、マサ坊に協力するって約束だからな。というか別に小高の許可なんかいらなんだよな、俺のほうが上司だし。

無理矢理押し通すこともできないこともないんだが……。ま、嬢ちゃんの時と同じやりかたでやらせるか。

「んじゃ、こうしよう。いまからそいつを連れてくるから、そいつとお前で一騎打ちで話し合いをしてもらう。認めるか認めないかは小高に任せる。それならいいだろ？」

「彼女の時と一緒に、というわけですね。わかりました、それならいいですよ」

これで当初の計画通り。雅夜も此処は自分で説得してくれるようだし、後は任せても大丈夫だろう。

「ちなみに小高みたいに否定派は他にいるか？いるならそいつも一緒に話し合いに参加してもらうことになるが――」

『『戦力になるんだったら、否定するわけがない！』』』

「いないようだな」

やっぱり否定派は小高の一人だけか。中学生だと知っても前例が前例なだけに賛成派が多いんだろうな。

＼side 雅夜＼

「君が榊が言っていた“期待の新人”ですかね？」

「期待されてるかどうかわかりませんが、たぶんそうですね。じゃあ貴方が榊さんの言っていた狩野小高って人ですか？」

「はい」

榊さんに呼び出され、俺は今署の待合室みたいなところでこの人と対面している。なんか凄い俺のことを嫌ってるように思えるほど、険悪な雰囲気なんですけど。俺なんかしたか？

「んじゃ、御託を並べるのは好きじゃないんで短刀直入に言わせて

もらいます。認める」

「……年上に命令口調とはいいい度胸ですね。そんなんで素直に『はい、そうですね』とでも言うと思うますか？」

「思わねえな。だがまあ、榊さんとの同級生って話だし、もしかすると、とも思っていてな」

「ないですね。そもそもワタシは学生のころから榊のことは好きではないんです。アイツはいつも風の奴と一緒に暴れ騒いでいて、ワタシと芳樹は毎回その後始末をしていてんです。あ、風と芳樹というのは榊と同じくワタシの同級生のことです」

「昔から変わってないんですね榊さん。まあ、楽しめる時には楽しむってのは賛成しますが」

「君もあの人種と同じ思考の持ち主ですか。ますます否定したくなりましたね」

人生は楽しんでナンボでしょ。というか今さらつと榊さんと父さんのことを『あの人種』って言わなかったか？結構毒舌なのかこの人？

「んー、やっぱりダメか。榊さんの言うとおりお堅い人なんだな」

「ええ。ですので諦めて帰ることといいでしょう。これ以上話ても無駄でしょうし」

そう言つて席を立とうとする狩野さん。

仕方ない、か。あんまり使いたくなかったんだが、切り札をきらせてもらいましうか。

「いいや。実はまだこっちはアンタを説得する材料があるんでね」

「……？ですから、これ以上なにが出てこようがワタシは貴方のことを認めないと言つてるではないですか」

「いいから座れつて。そういえば俺はアンタの名前を知ってるがアンタは俺の名前知らないだろ？自己紹介くらいさせろや」

——さあ、
思い出スウジテを思い出させてあげますか。

e p 1 - 4 (前書き)

「信じられないか？まあ、いきなり現れたガキが昔の同級生の息子だった、って言われても確かに信じられないだろうな。アンタの立場なら俺もそう思う」

「え、ええ。それは嘘で、榊と口裏を合わせると考えるのが妥当なところでしょう。しかもあの二人は今海外で忙しいようだし、こっちに家族がいるとは思えません」

子供達を置いて夫婦で海外出張。ありえなくもない話だが、どちらかと言うと一緒に連れていくのが普通だろう。

「そうだな……。んじゃ、俺があの子の息子っていう証拠があれば信じてもらえるか？」

「証拠があっても認めるかどうかは別問題です。たとえばあの二人の息子であっても私を説得させるような物がないとダメです。……むしろ本当にあの二人の息子なら認めたくありませんけどね」

手で頭をついて溜息を吐き、「やれやれ……」と呟きながら顔を横に振る狩野さん。

「まあまあ落ち着いて。証拠ってのは何もDNAだとかそういうのではなくてですね——」

「―――【仕掛け人もビックリ。偽ラブレターであの人を釣
つてみた！〜大爆笑必須のスペシャル〜】。アレ、今でも家にある
んですよ？」

「ぶはっ！……！」

家にある一本のビデオ（十数年前なのでDVDなどはない）の題名
を告げると、俺の発言が予想外だったのか狩野さんは思いつ切り拭
いた。そりゃあもう盛大に―――まるでマンガやアニメのワン
シーンかと思えるほどに。

「ど、どどど、どどどどうしてそれを貴方が知っているんですか
っ！？あれは全て燃やして無かったことにしたはずです！！」

「いや、あの二人がそんなヘマするわけねえだろ。きちんとマスタ
ーテープは残してあって、狩野さんにバレないように量産して皆に
配ったらしい。榊さんも持っていましたし」

「……………あのクソ野郎ども……………！」

おい、口調がおかしくなってますよ？

一応門外非出らしいのだが、相手が狩野さんだということを親父に
話したら一言で許可が出た。なんでも「こういう時の為にとってお
いたんだから、むしろ絶対にやれ！」ということらしい。それで榊
さんに現物を見せてもらい、タイトル通りに大爆笑をしてみました。
作られたのが昔だというのに、意外と上手く出来ていたことにも驚
いたが。

「あと、【高校生の夏々若気の至りでデリヘルへ】ってのもありましたね」

「うぐつ！こ、こういう場所では発言に気を付けてくださいっ！」

「あれはオチが哀しかったよなあ……。ま、まあ、人間誰しもなにかしら欠点はあるんですから気にしないでいいですよ？」

「疑問形で慰められましたも……」

オチは狩野さんの名誉の為言わないでおく。たとえ本番直前に勃たなくて相手に不能と言われたなんて、そんな男として哀しい結末は心の中にしまっておくべき……。あ。

ま、狩野さんの同級生（男子のみ）は皆知っていることなんだけどな。ちなみに今現在はどうなのかは知らない。

「どうです？それでもまだ俺があの子の息子だと信じられず、認められないか？」

「……あの二人の息子であることは認めます。貴方ぐらいの年頃の息子がいると聞いたことがありますので、間違いないでしょう。性格も似ていますしね」

「ったく、最初からそうだと言ってるだろ。いくらお堅いからって理由がなければ納得できないってのは面倒だ」

「直すつもりもありません。それに今更直せと言われても直せるものではありません」

直せなんて言わねえって。口調は個性の一つでもあるんだ。それを他人がとやかく言う資格はないだろ。

などと考えていると、狩野さんがこつちを——俺の目を真正面に見てきていた。さっきまで俺に弄られていたときにしていた目とは違く、真剣そのものだった。

「しかし、貴方を認めることはできません」

「……ほう」

「確かにあの二人の息子なら、榊の言うとおり洞察力がよく仕事が出来来る優秀なタイプでしょう。それに風の息子なら体力と武力もあるでしょうし、現場でも力になるかもしれない。中学生という年を考えないのなら、人手不足なこの部署には是非欲しい人材です」

「ならば、なぜ？」

中学校なんてほとんどサボっていても、テストの日だけしっかり行って良い点数を取ればある程度の成績はもらえる。受験が大変だと言われても、後期で受けるのであれば内申なんてあまり関係ない。だから俺は必要最低限しか学校には行っていない。

だからこそその《なぜ？》。断る要素が俺にはわからないのだが？

「双方にとって利益しかない……とまではいかなくても、損失より利益の-highははずだ。前例もあるみたいだし、二度目はそこまで批判されていない」

「逆に聞きますが、なぜそこまでして刑事をしたい——いえ、刑事をしなくてはならない理由はなんですか？」

「……………そっचा」

聞かれるとは思ってはいた。が、今までのノリだと最後まで聞かれないままだと思っていたんだけどな。やっぱり聞いてくるか……。簡単に誤魔化せるとは思っていない。誤魔化そうとも思っていない。俺はこの質問が来たら正直に話そうと最初から思っていた。

「言えないのですか？」

「いや言えるさ。確かに俺は狩野さんの言うとおり目的があつてこんな馬鹿げた真似をしようとしてる。けどな、その理由は単純明快なんだ。ただ——捜し出してぶん殴りたいクズ野郎がいる。

それを成し遂げるには警察の力が、警察の後ろ盾がいる。だから俺はここに来ているんだ」

放火の時にすれ違った名前の知らない男。顔は覚えているし見つけようと覚えれば自力でも見つけられる。だが罪を自覚させるには警察の力が必要だ。

別に自力で放火犯を捕まえてぶん殴ってから警察に突き出してもいいのだが、それだと信用される可能性が低い。放火犯とそいつを繋ぐ手掛かりは《俺が見た》というだけで、証拠は無いに等しい。

だから発想を変えて、内部から犯人を捜すことにしたのだ。先に内部の者に説明などをしておけば、俺の発言が証拠としての材料に変わる。

「この言葉には嘘偽りはない」

「……でしょう、ね。いやはや驚きましたよ。彼女と似たようなことをいうなんて、境遇だけでなく性格まで似てるようですね」

「彼女と似てる？………。……ちなみにそいつはなんて言ったんだ？」

「《理由なんているのかい？バカを見つけたらぶん殴ってでも正す。異変を見つけたら正常に戻す。ただしきことをするには警察の力が必要というのがわかったんだ。だから私はここに来た》。これが彼女の言葉です。中学生だというのにやけに達観している物言いに、今まで否定していたのが馬鹿らしくなって思わず認めてしまいましたね」

懐かしい思い出話をするように目を細めてどこか遠くを見ながら狩野さんが呟く。

俺と同じ思考回路をもつ女。気にならないといえば嘘になる。そいつがどんな奴なのかわからないが……一つだけわかる。絶対にろくでもない性格をしてるに違いない。

「ん？待てよ」

俺と同じことを言ったそいつが認めてもらったってことは……。

「認める、ということですよ。彼女と同じことを言うような人であるのなら、断ることもないでしょう」

「よっしゃっ！ついに認めてくれたか狩野さん」

「ただし条件があります！」

ん？また狩野さんが表情を変えたな。今度は真剣というか……必死な顔、つてところか？さっきから何度変わってるんやら。

「なんだ？」

「貴方は特務捜査四課に——つまり彼女のところに居てもらいます。基本は彼女と一緒に行動をし、事務処理などをやってもらいます。残業が出るほど仕事が残っていますので、仕事に困ることはないでしょう」

「どんとこい。事務仕事は得意なほうだからな」

情報処理をやるのにあまり難しい知識はいらない。纏めてわかりやすいようにするだけの単純作業は得意中の得意だ。

「ではせっかくですから今から特務捜査四課に行ってきてください。今日なら彼女もいますし、顔合わせて自己紹介でもしてきてください。本格的な仕事は明日からお願いします」

「りようかい、っと。場所はあっちの曲がり角の先でいいんだよね？」

「ええ。道がわからなくなったら近くににいる人に聞いてください。もし近くに誰もいなかったら地図を見るな——」

長いっ！それに地図はすでに頭のなかに入ってるから道に迷うようなことはない。もしかしてこの人って……過保護なのか？

「じゃ、じゃあ、そろそろいってきます！」

「あ、待ちなさい！まだ話は終わってな——」

迷わずダッシュ。すぐに廊下を曲がって狩野さんから見えない位置に移動……まあ、目的地はこっちなので適当に進んだわけじゃないんだが。

それからすこし進んで——【特務捜査四課】とドアにプレートが貼ってある扉の目の前についた。

「ここだな……」

榊さんと狩野さんから何度か出てきた“彼女”。わかっていることは俺と同じ年の女性で、思考回路が俺と似ているということだけだ。名前を知らないし、容姿も聞いていない。榊さんが事前に教えていなければ向こうもこっちのことを知らないだろう。

「やべえ。初っ端の挨拶をどうするべきか悩む……」

ここはやはりノリやネタに走ってお気楽に行くべきか？いや、それ

とも普通に入ったほうが無難か。

だが、相手は俺に似た性格をしているとのことだ。俺がしてもらい喜ぶのは……前者だな。

「迷う必要なかったな。……よし。んじゃ」

どんな入り方をするか決め、意を決してドアノブに手をかけ――

ガチャリ

――ようとしたところで向こう側からドアが開かれた。

そうか……。なにも選択肢はあの二つだけじゃなかったんだ。俺が好きなやり方はもう一つあったじゃねえかよ。

俺の好きなやり方。それは……予想外の行動で相手を驚かせることだ。

「特務捜査四課は君を歓迎するよ」

「犬小屋ね……。俺たちは警察の犬。そんな俺たちの拠点だから犬小屋ってことだな」

部屋の中から中学生とは思えない大人びた印象を与える女性が現れた。

身長は俺と同じくらい（165cm）で腰まで届きそうな長さの金髪。寝起きなのか微妙に寝癖のついた髪の毛を気にせずに、グリーンライトの目を光らせて口の端をフツとあげて笑みをこぼす。

「ようこそ、浅月雅夜君」

e p 1 - 5 (前書き)

コンコン

『起きてるか嬢ちゃん?』

『ああ、起きてるよ戌井。鍵はあいてるから勝手に入ってきて』

『そうか。なら失礼するぜ、嬢ちゃん——オイ。嬢ちゃんは女の子なんだから服はちゃんと着とけ。しゃきつとしたりは言わんが、せめて下着にワイシャツだけの格好はやめろ。目のやり場に困る』

『ラフな格好が好きなんだ。それにこらくらいなら見られても構わないし、戌井が変な気を起こすとも思えない』

『それはそうだけだな。……だが今日は別だ。この後、此処に俺の知り合いが来るから着替えておけ。初対面でその格好はマズイ』

『戌井の知り合い、ねえ……。こんなところに来る物好きな奴もいるんだね。どんな奴だい? 場合によってはこの格好で出迎えるの辞さない覚悟だよ』

『本当に止める!……まあ、どんな奴かは会えばわかる。性格は良いとも悪いとも言えないが、面白い奴だから嬢ちゃんも気に入ると思うぞ』

『そうか、なら楽しみだね。……おや? 戌井、背中にガムテープが貼られてるぞ』

『マジか! ? くそつ、あの時か……! すまんが嬢ちゃん、取つてくれねえか?』

『ああ、構わないよ。さて————どう出迎えるのが一番かな? やはり相手の意表をつくのは定石だが……』

『どつでもいいがちゃんと着替えるよな……』

「——ようこそ、浅月雅夜君」

部屋から出てきたそいつは、まだ名乗ってもいないのに俺の名前をフルネームで言ってきた。つまり榊さんが俺が此処に来る前にこいつに事情を説明しておいてくれた、ということだろう。気が利いてるな。

「あんたが榊さんや狩野さんが言っていた“嬢ちゃん”で間違いないようだな。俺のことは知ってるみたいだが、一応挨拶くらいさせてもらうぞ。初めまして、浅月雅夜だ。諸事情でしばらくこの世話になるみたいだから、よろしくな」

「知つてると言ってもほんの少しだけだね。私の名前は片桐千夏。とある事情で警察の真似事をしてて、この特務捜査四課で働かせてもらってる」

自己紹介とともに差し出してきた手を握り返し、部屋の中へと招き入れてもらう。

部屋の中は思ったより質素だった。中央に長テーブルが一つあり、その上に5台のPCと書類の束が並んでいる。さらに壁際には書棚があり様々なファイルや書物が所狭しと置かれていて、中には“千夏ちゃんの極秘ファイル”と書かれた他のファイルとは比べ物にならないほどの厚さをもったものである。他にもハンガーラックや上質そうなソファなどといった生活臭のするものもある。

「適当に座つて。今コーヒーいれるから」

「別に構わない——と普段なら言つてるところだが、今日はありがたく頂戴する。どうにもこの部屋に入ってから殺……じゃなく

て寒気が止まらなくてな、暖いものが恋しいところだったんだ」

「へえ……」

コーヒーを煎れながら感心したように呟く片桐。

さつきから感じる殺気。ギャグではなく、この部屋に入ったときからずっと感じているのだ。それもそのらの不良とは桁違いに強い気配。向こうは明らかに俺を敵対視している。

「ちなみにそれってあの辺から感じるんじゃないかい？」

後ろ手にソファのある辺を指す。よくわかったな。なにかあそこにあるのか？と、思っていたら突然ソファが動き出した。

心霊現象のように揺れるとかではなく、まるで生き物かのようにこっちに近付いて——って、本物の生き物じゃねえかよっ！？

「紹介が遅れたね。この子はフウ、私のパートナーみたいなものだよ。浅月君が感じてるのはこの子からじゃないかい？人見知りな性格だから突然入ってきた浅月君を警戒してるだけだと思うよ」

「くうくん」

毛並みは薄いゴールデンで蒼い瞳をしている。

大きさは——俺がソファと見間違える程、と言えば想像できるかもしれないが、軽く人間一人くらいは背中に乗れそうなくらいデカい。

「……ってオイオイ。随分とツツコミどころが満載のが出てきたな。フウと言ったか？犬……にしてはデカすぎないかコイツ？」
「普通の犬じゃないからね」

近寄ってきたフユウ(?)を撫で、出来上がったコーヒーを俺に手渡して片桐も手近な椅子に座る。フユウは片桐の隣(当たり前だが床)に座りさつきまでのようにまた動かなくなった。傍目には眠ってるかのように見えるが、殺気を浴びさせ続けられてるので眠ってはいないはずだ。

「じゃあなんなんだコイツ。まさか狼だとかいうんじゃないだろうな？」

「さあ？実は詳しいことは私も知らなくてね。でも犬って言うて怒るから犬ではなさそうなんだ。私とは子供ころからの付き合いでね、一緒にいることが多いんだ。それに近所の子供たちから凄く人気があるんだ。凄くモフモフしてるよ、触ってみる？」

「是非」

もふもふ好きの俺としては断る理由はないわけで、さっそくフユウに近づく。

一瞬嫌そうな瞳をこっちに向けてきたが、すぐにどうでもよくなつたのか瞳を閉じる。了承ってことでいいみたいだ……よな？

「……………おお」(もふもふギュー)

「素晴らしい抱き心地だろ？一度やると病みつきになるほどの……」

……………はう」(もふもふ)

「く、くうーん!？」

俺が遠慮なく抱きついていっていると、片桐も吸い寄せられるように反対側からフユウに抱きついた。必然的に片桐の顔が間近に迫ったので顔を逸らすと、さらに顔を逸らす要因が見えてしまったので慌ててフユウを抱くのを止めて立ち上がる。

「ん？どうしたんだい浅月君？」

いきなり離れた俺を驚いた……様子ではなくニヤついた顔でこつちを見てきた。

そうそう。あえてツツコなかったが、コイツは今————下着にワイシャツだけという格好をしている。追記するならば、ワイシヤツのボタンが上から三つほど外れており、大人びた胸部が自己主張をしていた。

「……わかつててやってるだろ」

「スルーされると哀しいものなんだよ？ずっとツツコミを待ってたのに、完璧に無反応だったんだからね。ちよつと強硬手段に出てみた」

「でなくていいからっ！！」

「嬉しいだろ？」

「いや、全然」

「素で返された！？………君は男の子だよね？どうして平然としていられるんだい。自分で言うのもなんだけど、私のプロポーションは凄いだろ」

「ぶつちやけると、昔から親戚とか知り合いにその手の誘惑をかけられまくってるから慣れた。むしろ平気にならないと死ぬ」

「いやな慣れだね……」

最近じゃ悟りを開けたかと思えるほど性への興味が無い。あるにはあるが、よほどのことがない限り平常でいられるようになってしまった。ホント、嫌な慣れだ。………周りからみれば羨ましい状況かもしれないが、当人の俺にとっては死活問題なんだからな。

「まあ、そこはおいといて。いい加減ここですべき仕事について教えてもらえないか？自己紹介もすんだことだし」

「そうだね。と言つても此処けいさつにいるけど私たちの身分が学生である

ということにはかわりはない。だからそこまで難しい仕事は回ってこないよ。せいぜい書類の整理や刑事が真面目に行くほどのものではない事件に私たちが変わりに出向く、くらいかな。ごくまれに凄く面倒なやつも来たりするけど、それはその時に説明するよ」

「ふむふむ。それで」

「以上だよ」

「なるほ——は？」

なるほどといいかけて止まる。今ので終わりってわけないだろ。冗談になってねえぞ。

「冗談じゃないからねえ」

「心を読むな。……って、え、マジ？ たったそれだけ？」

「うむり。だが書類整理を舐めちゃいけない。膨大な数の資料の中から必要なものだけ取り出す技量、いらないと判断したところは躊躇わずバツサリ切り捨てる度量。そしてやつてもやつても減らない書類に絶望しない忍耐力が必要なんだよ。幸いにも君はどれも持つてみたいけど、君が此処に來た目的を果たせるのは一週間後、よくて四日後からだろうね」

時間がかかるのはもとより承知している。行動を起こす場合は事前にその場の雰囲気になれておく必要があるからな。ま、受け持つ仕事の合間に少しずつ進めておいて、動けるようになったらすぐに行動できるように……して……お………。……おい、待て。今コイツ……。

「あー、片桐。一ついいか？」

「なんだい？ 私のスリーサイズなら秘密だよ」

「今のお前の格好からなら見ただけである程度予測できる——

——って、そうじゃねえ」

話をそらそうとするな。

「確かに俺はお前の言うとおり書類整理は出来るし、此処に来たのもとある目的があったからだ。だが——そのことについてお前になにも話していいいよな？」

「それは戌——」

「ちなみに榊さんは俺が目的をもっていることは知っているが、俺に忍耐力があるとは思ってないぞ。なにせ、忍耐力は親譲りじゃないからな」

「——っ！……戌井の古馴染で浅月君の両親である浅月風雅と深夜。確かに二人とも忍耐力……というより我慢力が全くといっていいほどない。二人と似ているあさつき君なら忍耐力も同じだろうと戌井は思っているはず、ってことかな？」

「ああ、それであってる。だが、質問を質問で返すな。俺の問いに答えろ」

「それはほら、あれだよ。企業秘密ってやつさ」

企業秘密、ねえ……。

「俺の幼馴染に隠し事をするさいの口癖が『企業秘密だよ』ってやつがいたが、そいつによると企業秘密ってのは、ただたんに事情があつて話せない事や話しても信じられないようなことを隠すときに使うらしいんだわ」

「……………」

俺の言葉に片桐は、口元を隠すように手をあてて、俺の考えを探るような視線を向けてきた。

……口元を隠していてもわかる。コイツは今——楽しんでる。

「お前さんはどっちだ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1870x/>

バカノリIF～杜丘と翡翠の非日常な日常～

2011年12月7日23時46分発行